

## 平成 28 年度 第 2 回 南三陸町地域資源プラットフォーム設立準備委員会

日 時	平成 28 年 10 月 25 日 (火) 17:15 ~ 19:30												
場 所	南三陸町役場 2 階大会議室												
次 第	<p>1 開会      2 会長挨拶      3 協議等</p> <p>1) 前回の振り返り      2) 自然環境活用センターについて(課題と可能性: 前回続き)      3) 地域資源プラットフォームが目指す方向性の確認      4) 地域資源プラットフォーム機能と役割イメージ      4) その他(事務連絡等(次回日程、他))      5 閉会</p>												
	<p>&lt;資料&gt;</p> <table border="1"> <tr><td>次 第</td><td></td></tr> <tr><td>ビジョン</td><td>持続可能な南三陸のカタチ</td></tr> <tr><td>資料 2-2</td><td>自然環境活用センターについて</td></tr> <tr><td>参考資料</td><td>「Center for Alternative Technology」</td></tr> <tr><td>資料 3</td><td>地域資源プラットフォームが目指す方向性</td></tr> <tr><td>たたき台</td><td>地域資源プラットフォーム機能と役割イメージ</td></tr> </table>	次 第		ビジョン	持続可能な南三陸のカタチ	資料 2-2	自然環境活用センターについて	参考資料	「Center for Alternative Technology」	資料 3	地域資源プラットフォームが目指す方向性	たたき台	地域資源プラットフォーム機能と役割イメージ
次 第													
ビジョン	持続可能な南三陸のカタチ												
資料 2-2	自然環境活用センターについて												
参考資料	「Center for Alternative Technology」												
資料 3	地域資源プラットフォームが目指す方向性												
たたき台	地域資源プラットフォーム機能と役割イメージ												
出 席	<p>●委員(敬称略)</p> <p>&lt;出席: 16 名&gt;</p> <p>佐藤太一 (FSC/FM)、小野寺邦夫 (FSC/COC)、後藤清広 (ASC)、      阿部寿一 (ASC/COC)、川廷昌弘 (FSC 普及)、佐藤克哉 (バイオマス産業/循環)、      工藤真弓 (山さございん)、阿部民子 (海さございん)、      阿部國博 (南三陸農業協同組合)、阿部富士夫 (宮城県漁業協同組合)、      高橋長晴 (南三陸森林組合)、安藤仁美 (公募委員)、佐藤洋子 (公募委員)、      最知明広 (行政/副町長)、高橋一清 (行政/産業振興課長)、      小山雅彦 (行政/環境対策課長)</p> <p>&lt;欠席: 3 名&gt;</p> <p>柳田豊久 (バイオマス産業/転換)、山内大輔 (南三陸商工会)、松田恭子 (学識者)</p> <p>●アドバイザー</p> <p>阿部拓三 (産業振興課 復興支援専門員(復興庁派遣)、博士)</p>												

●事務局

企画課：檀浦室長、太齋係長、阿部主査、松本主事

産業振興課：佐久間参事、佐藤補佐、及川係長

環境対策課：星補佐

事務局業務支援：山内（株式会社 ESCCA）

## <1. 開会>

## <2. 会長挨拶>

会長：1回目の会議から1か月経つため、振り返りの意味も含め、前回資料をそのまま掲示させていただいた。本日はプラットフォームの方向性や、自然環境活用センターの概要について説明しながら、皆さんで議論したいと思う。

## <（「山さ、ございん」「海さ、ございん」について>

- ・「山さ、ございん」、「海さ、ございん」について、川廷委員より提示の資料に基づき説明いただき、情報共有がなされた。

## <前回欠席の委員紹介>

- ・前回欠席の高橋長晴委員、高橋一清委員より、一言ずつ自己紹介を頂いた。

## <3. 協議等>

### 1) 前回の振り返り

- ・前回「持続可能な地域の定義」について、ワークショップ形式で出された意見を事務局で整理した模造紙に基づき、振り返りがなされた。別紙1参照。
- ・前回「南三陸の現状・課題・可能性」について、ワークショップ形式で出された意見（付箋）に基づき、事務局側で作成した資料**ビジョン**について説明を行った。

事務局：**ビジョン**ということで持続可能な南三陸のかたちとはどういうものなのかについて、皆さんのご意見を基に示したもの。当然自然が土台にある。これは適切な資源管理がされている、あるいは環境保全がされているということが前提という共通認識だったと解釈した。次に、それをつなぐ人。担い手になる人がいるのかどうか、仕事として成り立つのかどうか。頑張れば儲かるという環境があるのかどうかが重要。人が自然に手をかけることによって自然から恵みが返ってくる、これが循環していて途切れないようにしていくことが持続可能なまちづくりには重要、と解釈した。そして中心に研究や学びがあるというのが重要なのではないか。前回の議論はこのようにまとめられるのではないか。

委員一同：同意

### 2) 自然環境活用センターについて

- ・事務局より、**資料2-2**に基づき、「自然環境活用センター」（愛称：志津川ネイチャー

センター「以下、ネイチャーセンター」)について説明を行った。

事務局：研究者の立場から見た南三陸の現状・課題・可能性について、当時研究員であり、現在産業振興課　復興支援専門員（復興庁派遣）としてネイチャーセンター準備室での活動にあたる阿部拓三氏をアドバイザーとしてお招きした。阿部氏からお話しをいただく。

阿部氏：2005年から2009年までネイチャーセンター研究員として活動していた。本日は研究者の立場から、地域に研究者がいるとどのようなメリットがあるのかを話す。

一番のメリットは、地域の目線で、地域の方とコミュニケーションをとりながら自然環境のことについて問題提起したり、対策を講じることができることだと考える。2005年より、戸倉の牡蠣の密植について問題提起しながら、漁協と議論していた。こうしたことの積み重ねが、今回のASC取得にもつながっていることなのではと思っている。地域で毎日海を見ているから見えてくることがある。例えば震災後は、雨が降った後、こんなにも茶色い海を見たことがなかった。なぜ茶色くなるのか。戸倉の海岸の土置き場から土が大量に流れ出ている。海の中で太陽の光は1m通っていくと半減する。わずか数10cm泥水が入っただけでも海の中は真っ暗。そのような環境で海藻にとってダメージがあるのは間違いない。また、近くの牡蠣いかだも心配である。牡蠣は水を300ℓろ過する。つまり、泥水が恒常に流れだしてしまっては良いことはない。地域に研究者がいるからこそ見えてくることについて問題提起できること、アクションを起こせることは、大きなメリットだと思う。

もうひとつメリットがある。当時ダンゴウオやクチバシカジカの研究をやっていた。地域の役に立ったなと思う瞬間があった。それは、町の小学生と県外の小学生が触れ合う機会があったとき、町の小学生が、「お前、ダンゴウオ知ってるか」とふるさと自慢をし出した。産業とはまた違うサイエンスの研究をさせていただいたことは良かった。「サイエンスキャンプ」というものをこれまで行っていた。今年7月に「ネイチャーセンター 友の会」で「子ども自然史ワークショップ」を行い、「サイエンスキャンプ」の卒業生が手伝いに来てくれた。今、大学生である彼女は、貝の研究をしており、貝の魅力を紹介する本を出版した。このように、ふるさとのことを自慢したり、鮭ではないが、外に出てもまた戻ってくるという人の循環が起きている。それは純粋でかつ本物のサイエンスがこの町にあるから。これを生み出すができるのは、地域に根差した研究者がいるからこそできることではないかと改めて思った。

・事務局より、参考資料に基づき、事例“Center for Alternative Technology”（以下 CAT）について説明を行った。

### 3) 地域資源プラットフォームが目指す方向性の確認

・「地域の現状・課題・可能性」について、ネイチャーセンターの説明や、CAT の事例も踏まえ、前回の議論の捕捉をワークショップ形式で行った。別紙 2 参照。

委員：「里さ、ございん」もいるのではないか。

委員：学会などの開催地や、「南三陸学」のようなひとつの学問ができるても良いくらいの面白みがある。「連環学」など。学会の拠点としても色々なジャンルを活用できるので、開催地としてもふさわしい。

委員：環境省のビジターセンターと、南三陸町のネイチャーセンターとの関わり、違いは？

事務局：環境省のビジターセンターの目的は、三陸国立公園の紹介施設。事業としてかぶる部分は多少出てくるだろうが、ビジターセンターに研究はできない。

委員：海浜センターは復活しないのか。

事務局：県の施設が復旧するということで、アワビ稚貝の生産などは県がやるとなった。この施設の誘致もしたが叶わなかった。今のところ海浜センターの復旧はしないということになっている。

委員：種苗生産などの役割はネイチャーセンターが担う可能性はあるのか。

委員：漁師たちが、ワカメの種や牡蠣の種が見えているか調べてほしいと持ち込んだ場合、対応してくれるところはできるのか。

委員：山も・・・。

委員：少しでも山野に役立てる部分があれば知識として提供する部分は手伝ったほうが良いと思っている。しかし作業については専属業務になってくるので、漁協や生産団体のほうで知識を学ぶ機会をつくり自分たちもできるようになっていったほうが良いと考える。

委員：同じ漁業者でも水産試験場で研究をしてもらうところと、進んでいる地域は自分たちでやるところとある。外に出すことによって時間もそれだけかかる。自分たちでできる人たちを増やすほうが良い。

委員：山についても。例えば基礎研究の段階で手伝ってもらえそうな大学を紹介してもら

うなど、ハブ機能としてマッチングなどはネイチャーセンターに担ってもらえるとよい。

委員：海浜センターに取り組んでもらっていたことについてありがたいと思っている人もいる。県の水産試験場があるから町ではやらないのか。

委員：海浜センターの事業として行われていたのか。

事務局：町の直営だった、つまり税金で行っていた。

会長：町として、どこまでつながりを持つのか。町として、ネイチャーセンターとして、どこまでどのような機能をもつのか、ということを今回意見を出してもらい検討していきたい。

委員：収益事業的な要素をネイチャーセンターが持っても良い。

委員：漁業者や林業者との連携も見据えて、関心のない人にも啓発していく活動は大切。

事務局：まず必要な要素として意見をすべて出していただき、次回から実際にどのように運営していくかも意識して、絞り込みに入る。優先順位を付けざるを得ないとは思うが、今は自由に意見を出していただきたい。

委員：例えば、セルロースナノファイバーなど、植物由来の新素材についての研究機関を南三陸に持つてこられないか。

委員：セルロースナノファイバーに関わらず、木材加工の技術を研究する機関を持ってこられないか。

委員：名のある先生を頼って、そういう人が吸引力になって相談者や研究者が集う。人が寄ってくるものを南三陸につくることができると良い。

委員：学会のようなものを招致できないか。

委員：学術の方々は、本物がそこにある、研究や開発に直結するフィールドがそこにあるということに魅力を感じる。南三陸はその部分の可能性がある。ネイチャーセンターの歴史をみても、研究者の方々がおっしゃることとして、そういう魅力が南三陸にはある。

委員：宮城県、さらに南三陸、そこに研究者が行ってみたいと思うものがあれば。

委員：植生関連については、南三陸ならではではないか。

委員：森林生態学など。核なる森林生態学の先生がいて、次に木質関係の先生たちが集まつてくる、など人が集まる展開になるのではないか。

委員：情報を持った人が集まるので、更に情報が集まるという連鎖が起こる。

委員：大学などの先生方が南三陸に注目している部分は意外にいろいろとある。

委員：山の栄養が海に注いで、それが水産物を育てるということは間違いない事実だが、それを理論づけて説明できる人はまだ誰もいない。

委員：海の栄養を山が吸収している、ということも理論づけられているが実証されていない。その循環がどうなっているのかがまだ分かっていないので研究が進められれば良い。

委員：海山里全体のフィールドをひとつとした研究を行える地は南三陸以外なかなかない。自然資本学のようなかたちで、今までにない、森里海のつながりを解明する場であるということを発信していくと、魅力を感じる研究者はいるのではないか。そうでなくても来られている先生方がいるのであれば、新しい領域をつくることのできる可能性があるのでないか。

委員：生態学という学問にとどめず、なりわいにしていくことが重要。研究をお金に換えていく。資本学。

委員：基礎研究と応用研究が必要。

委員：研究者の話は難しいので、通訳の機能もネイチャーセンターには必要。

委員：研究者が研究したことを、通訳を介して多くの人が分かるようにして伝えていけば、多くの人が興味を持ち、もっと集まつてくるのではないか。南三陸の豊かさはこうした点にあるのでは。

委員：南三陸はなくなりつつある里山がきれいに残っている場所と言われている。ある研究者から、希少種（鳥）がいるということは分かっているが、いるということを発信しな

いでくれと言われた。発信すると見に来た人が農地を荒らしてしまうと。そのあたりは配慮が必要。

委員：配慮するためにも、基礎研究や研究者がいないとどう配慮してよいか分からぬ。

委員：研究者の中には配慮しながらやっている人ばかりではない。

委員：ネイチャーセンターは地元の小中学校との連携はあったのか。

事務局：町内の小中学校には無料で講座など行っていた。

委員：先ほどのアサリの浄化作用など、説明されないと知らなかつた。地域に教材となるものがあるので、子どもたちに、環境をサイエンスという目線で見せていくは、この土地のことを、地域の魅力を、大人とはまた違う角度で子どもたちが見つけていけるのではないか。子どもたちを巻き込むには、ネイチャーセンターがサイエンスとして伝えていく部分は必要。

委員：町が運営する施設なのであれば、教育機関と連携し、総合学習などの中で必ずこの町の子どもたちは町のことを学べる、という状態にしたい。

委員：生身の教材が町にあるのであれば、生かしてほしい。

委員：地域によつたり、年によつたり、先生によつたりして学んだり学ばなかつたりといふ差が出るのはもつたいない。必ずどの子どもも学ぶという状態にしたい。

委員：ある小学校は地引網の活動があるが、今は魚がいないので漁師さんたちが魚を持ってきて網に入れてくれる。しかし、ここにネイチャーセンターが関われば、なぜ今、魚がないのか、という説明もでき、子どもたちはもっと興味を持つのではないか。

委員：ラムサールにしても、もともと子どもが海辺で活動をしていたなど、地域活動があつて認められる部分が多いので、ラムサールに手をあげた町としても、今からワイスユースの取り組みを教育機関と一緒にしていくことは、魅力的だし必要なことだと思う。

・「南三陸の現状・課題・可能性」について、官がやるべきもの、民がやるべきもの、そのどちらでもないものについて、事務局が分類したものを提示し、更に本日出た意見も含め委員と共に改めて分類した。別紙 3 参照。

事務局：官でも民でもない、真ん中の領域をプラットフォームが担うイメージである。更に意見が出されたプラットフォームの役割について、組織や資金面も含め、次回・次々回で絞り込みながら検討して行きたい。

・「ブランド」に対して共通認識を持つために、資料 3と参考資料に基づき、事務局より説明を行った。

事務局：一次生産額をしつかりあげていくこと、これが地域の持続可能性につながるのでないかということを「地域再生計画」に書いている。理想はブランドをしつかり認知して頂くことによって、これまで 1,000 円で売っていたものが 1,500 円で売れていくことで、一次生産者、加工業者など、それぞれの段階で利益を得ていくこと。

委員：1,000 円で売るものと 1,500 円で売るものと、同じ品で何か価値をつけて価格を上げて売るということか。

事務局：同じものだと難しい。牡蠣だと、いろいろなサイズがある中で、ある特定のサイズの粒だけを集めて売ることによって全体を引き上げていくイメージ。

委員：まさにやりたかったこと。1 個 1,000 円で牡蠣を売るとなると、消費者に納得してもらえる価値がないと当然出せないし、売れない。今まで、そこそこの品質のものを大量につくり、一般消費者に流通させることをしていて、今もそこが主力である。しかし、ターゲットを絞って売っていくというやり方、今までの対極にあるやり方をするということ。牡蠣は、ほぼ天然に近い種を使った食べ物なので、1 個 5,000 円のマンゴーを食べるよりも価値がある。しかし、まずターゲットは絞らねばならない。ハリウッド・スターにうるとか。

委員：一次産業は成長産業である、ということを目指し、おもしろい産業にならないかなと思う。生産者はたくさんいるが、今までと同じ方向で進む人もいれば、付加価値をつけて高く売る人もいて、色々な方向を目指して良いと思う。新しいやり方も、それが評価されれば全体のモチベーションもあがっていくのでは。

委員：地元の生産者とシングルシードの牡蠣を作ったが、歩留まりが悪い。選別していくと、とんでもない品質のものができるが、1 個 1,000 円でも再生産できず、今ストップしている。作ろうと思えばできると思う。しかし、実験しようと思っても生活があるので、経済的になかなかできない。

委員：目指す理想に行きつくまでのステップが必要。例えば、FSC 材の宿泊施設をつくりたくても、資材が高すぎて使えなければ実現しない。FSC 材でつくった建物に泊まりたいよね、という機運が増すなど、そこまでいきつくまでのランディングが必要。

委員：何をもってブランドの質とするのかがないと、うまいの、いいの、という話に戻ってくる。質の部分は大事。南三陸ブランドの品質とは何なのか、というものがあったうえでストーリーが加わっていくといった順番である。

委員：価値をつけた商品をどう見つけてもらうのか。発信力も必要。

事務局：地域商社という考え方方が有効かもしれない。販売戦略。

委員：質の価値について、機能的価値と情緒的価値と 2 つあると思う。機能的価値の部分は商品ごとに変わるので、規格などがそれにあたる。色々な商品が地域内で出てきた中で、重なる部分として残ったものが情緒的価値の部分で、それが南三陸全体のブランドと言えるのではないか。南三陸全体で約束できる部分について、共通点を見出していくことで定義していく方法。逆の方法は、南三陸ブランドの定義として何を約束するのかをまず設定する方法。

委員：玉石混交となつては、ストーリーの方まで影響してしまうので、質は担保しなくてはならない。

委員：質の定義は、例えば牡蠣と木質商品では異なつてくる。質の定義をする前の共通定義があり、個々の商品で質の定義を担保していく。その品質をプラットフォームが管理する必要がある。

委員：情緒的価値も機能的価値も両方必要。

委員：アイテムごとに品質を定義していく必要もあるが、まずはプラットフォームとして共通で何を約束すべきかということをまず考えねばならない。

事務局：南三陸ブランドについては、目指すところについて、共通認識が得られ、同意されたという理解でよいか。

委員一同：同意

委員：ASC の牡蠣をヨーカドーやイオンに出している。どこが他の牡蠣と違うかについて悩んだ。ASC を目指した思いとしては、96人が奇跡的にひとつのグループを組んで取り組んだということ。奇跡が起きた牡蠣を作った、そういうことがコンセプトとしてプラスされても良い。消費者は何を見て牡蠣を選ぶのか。価格なのか国際認証を取得したものなのか。

事務局：ストーリーの部分かと思う。ここに質の議論をしっかりと加えていく必要がある。うたい文句としてどう消費者にコミュニケーションしていくかも重要。個々の商品として考えていくことも必要で、全体として管理していくことも必要。

#### 4) 地域資源プラットフォーム機能と役割イメージ

- ・事務局より、地域資源プラットフォーム機能と役割について、たたき台の資料に基づき、説明を行った。

事務局：このたたき台について、次回、必要、不必要について議論したい。例えば、教育であれば、地域の子どもたちにどのように、誰が資金を負担していくのかなど、誰にどのように、といった部分も議論したい。また、どのような組織で行っていくのか、残り2回の委員会で議論していきたい。次回、このたたき台に意見を頂くところから始めたい。

#### ＜4. その他（事務連絡等（次回日程、他））＞

- ・事務局より 11 月 4 日（金）の入材育成セミナー「一次生産者が輝く無限大の可能性」についてご案内。
- ・最終回の日程については、2月 13 日（月）と仮置きする。
- ・次回会議は、11 月 22 日（火）、午後 5 時 15 分から。

#### ＜5. 閉会＞

以上